

THE NEW  
ザ・ニュー・ゲート  
GATE

風波しのぎ  
Kazanami Shinogi

21. 錬鉄の王

Illustration : 晩杯あきら



# 「THE NEW GATE」世界の用語について



## ●ステータス

LV:	レベル
HP:	ヒットポイント
MP:	マジックポイント
STR:	力
VIT:	体力
DEX:	器用さ
AGI:	敏捷性
INT:	知力
LUC:	運

## ●距離・重さ

1セメル=1cm
1メル=1m
1ケメル=1km
1グム=1g
1ケグム=1kg

## ●通貨

ジュール (J) : 500年後のゲーム世界で広く流通している通貨。  
 ジェイル (G) : ゲーム時代の通貨。ジュールの10億倍以上の価値がある。

ジュール銅貨 = 100J
ジュール銀貨 = ジュール銅貨100枚 = 10,000J
ジュール金貨 = ジュール銀貨100枚 = 1,000,000J
ジュール白金貨 = ジュール金貨100枚 = 100,000,000J

## ●六天のギルドハウス

一式怪工房デミエデン (通称:スタジオ)	『黒の鍛冶師』シン担当
二式強襲艦セルシュトース (通称:シップ)	『白の料理人』クック担当
三式駆動基地ミラルトレア (通称:ベース)	『金の商人』レード担当
四式樹林殿パルミラック (通称:シュライン)	『青の奇術士』カイン担当
五式惑乱園ローメヌン (通称:ガーデン)	『赤の錬金術師』ヘカテー担当
六式天空城ラシュガム (通称:キャッスル)	『銀の召喚士』カシミア担当

## 目次 Contents

用語解説	003
登場人物紹介	004
ワールドマップ	006
Chapter1 東の間の休息	007
Chapter2 錬鉄武闘祭	109
Chapter3 悪意の結晶	193
ステータス紹介	271

### シュバイド・エトラック

521歳。ハイドラグニル。  
ゲーム時代のシンのサポートキャラ。  
竜皇国キルモントの初代国王。

### フィルマ・トルメア

521歳。ハイロード。  
ゲーム時代のシンのサポートキャラ。  
姉御肌でパーティのムードメーカー。

### セティルミエール

515歳。ハイビクシー。  
ゲーム時代のシンのサポートキャラ。  
妖精郷で精霊と暮らしていた。

### ユズハ

エレメントテイル。シンに助けられた  
モンスター。基本は子狐の姿だが、  
人型にも変身可能。

### ティエラ・ルーセント

157歳。エルフ。  
強力な呪いの名残で髪の大部分が黒い。  
故郷を追放され、シュニーに保護された。

### シュニー・ライザー

521歳。ハイエルフ。  
ゲーム時代のシンのサポート  
キャラ。  
500年間シンを待ち続けた。

### ミルト

89歳。ハイビクシー。  
ロリ巨乳が特徴の元プレイヤー。  
戦闘狂として有名だった。

### シン

本編の主人公。  
21歳。ハイヒューマン。  
オンラインゲームで  
名を馳せた最強プレイヤー。  
デスゲームクリア後、500年  
後のゲーム世界に飛ばされる。

Chapter 1

束の間の休息

THE NEW GATE

エルトニア大陸

THE NEW GATE

海

グランモスト山脈

クリカラ

パツナー

ジグルス

No.43の聖地

エルクント

ローメヌン

クウエイン海域

竜皇国  
キルモント

バルバトス

ファルニッド  
獣連合

ラナバシア

聖地カルキア

レンツ

ラルア大森林

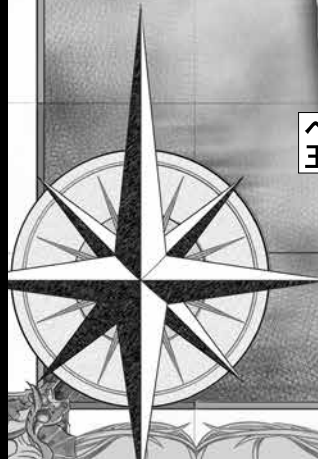
ベイルーン

ヒノモト

バルメル

亡霊平原

ベイルリヒト  
王国



オリジン1の半身とされる存在——冥王に会うために、一旦ベイルリヒト王国に向かったシンたち。

そこで彼らは、冥王がいるはずの亡霊平原で異変が起こっているという情報を耳にする。調査を行う過程で、冥王のいるダンジョンへ突入するシンたち。しかし、ダンジョンを進む中、パーティが分断され、シンはサポートキャラのシュニーたちと離れ離れになってしまう。

ダンジョン最終エリアのさらに奥へと飛ばされたのは、シンと元ブレイヤーのミルト、エレメントテイルのユズハの二人と一匹。彼らはそこで、冥王と対面する。そして、彼女からこの世界の秘密と、シン自身に何が起こったのかを聞くことになる。

一方、残されたシュニーたちには、かつての最強ギルド『六天』のメンバーを模したモンスターが襲いかかった。

無事に合流し、モンスターを倒したシンたちは月の祠へ戻り、しばし体を休める。その中で、シンはシュニーに冥王との会話を、そして、今後のことを伝えたのだった。

2時間ほどシュニーと一緒に過ごしたシンは、こっそり彼女の部屋から出た。

冥王から聞いた話をすべて説明すると長くなってしまったので、彼女に関係している部分だけ話し

て、自分の部屋に戻るつもりだったが……結局そんな雰囲気ではなくなってしまったのだ。

もつとも、2人で一緒に過ごしたと言っても、添い寝をしただけで、何らいかがわしいことはない。それなのに、つい警戒してしまう小心者なシンだった。

その背中に、シュニーが声をかける。

「堂々と出ていけばいいじゃないですか」

「いや、自分で休もうと言った手前、ちよっと罪悪感が」

休んではいる。ただ、自分の都合を押し通したという感が否めない。

「気配でバレていると思いますよ」

「……だよなあ」

シンたちが拠点にしている月の祠の中は、探知系のスキルやマップ機能などの居場所を探る能力が制限されていない。それなりに密閉性があつて素材も高級なので、気配が駄々漏れということはないが、現在月の祠の中にいるメンバーならば、どこに誰がいるかなどすぐにわかる。

シンの行動には、自身を納得させる以外の効果はなかった。

彼は覚悟を決めて部屋を出て、自身の部屋に戻る。

部屋に入ると、ユズハがベッドの上でお座りしていた。シンを送り出した時と同じ姿勢だ。

「おかえり」

「ただいま。もしかして、ずっと待っていたのか？」

「今起きた」

ベッドで寝ていて、シンの気配が近づいてくるのを察して目を覚ましたという。今は子狐こぎつねの姿だが、中身だけ大人モードのようだ。

「……新しい繋つながりできてる。シュニーと？」

「わかるのか。例の、オリジンのドロップアイテムとの一体化がうまくいったな。その時に繋がったみたいだ」

「これで彼女も一安心ね」

シュニーの部屋の方を向いて、ユズハはうんうんとうなずいている。

「姿が消えた時は、不安にさせちゃったからな」

「そうじゃない」

先ほどまでとは一転、首を横に振るユズハ。

「違うのか？」

ユズハによると、どうやらシュニーは自分とシンに特別な繋つながりがないことを気にしていたらしい。

「いやでも、俺はシュニーを選んだわけだし、指輪ももう少しで完成しそっだし」

シンとしては、特別な繋つながりがなくても関係ないと思っていたのだが、そういうものではないと、ユズハはお説教モードだ。

「ユズハはシンと契約してる。これはユズハにしかない繋つながり。ティエラも、ここにはいない彼女彼女の存在を通して繋つながりがある。でも、シュニーにはそれがない。サポートキャラクターとしての繋つながりは、あの子だけのものじゃないから」

ユズハが指摘した通り、エルフのティエラには、シンのかつての恋人であるマリノの能力が宿っているため、ある意味特別な繋つながりがあると見えるだろう。

無論、シュニーはシンに選ばれたことを喜んでいる。

しかし、だからこそ彼女は、自分だけの特別な繋つながりを求めるのだ。他者が取って代わることのできない、唯一無二の繋つながりを。

「もっとシュニーを可愛かわいがるべき」

なんとシュニーは、今まで時折ユズハに相談していたらしい。内面が成長し、ある意味最年長と見えるようになったユズハに、意見を求めたのだ。

「マジか、全然気づかなかった……」

言われてみれば、ユズハは夜間、時折どこかへ行っていることがあった。その時に話をしていただろう。

「でも、そういうのは俺に言われてもどうしようもないだろ」

可愛がるという点ではどんと来いと言えるが、特別な繋つながりについては、シンには対処のしようがない。

ユズハの場合は、モンスター扱いだからこそ、システムのなものもあって繋がりが持てた。ティエラとの繋がりは、そもそもシンが意図したものではない。

「そこはどうかするのが男の甲斐性<sup>かいしやう</sup>」

とは言いつつも、ユズハの言葉は冗談だとすぐにわかるほど雰囲気や響きが違った。

シンはため息をつきながら返す。

「無茶言うなって……まあ、今回のことで、少しは不安も晴れたかね？」

「くう」

おおきく  
大仰にうなずくユズハを見て安堵<sup>あんじょ</sup>する一方、もう少し察<sup>さつ</sup>することができるようにならないとい

けない、と思うシンだった。

+

ユズハとの会話の後、シンはリビングに向かった。

他のパーティメンバーにも、冥王と対面した際に何があったか伝えなければならない。きっとやきもきしていることだろう。

「待たせたか？」

リビングには、すでにシュニー以外の全員が集まっていた。時間の指定は曖昧<sup>あいまい</sup>だったとはいえ、

シンもことさら遅れて来たわけではない。それでもこうして集合しているということは、もしかすると、皆気<sup>みな</sup>になって休むに休めなかったのかもしれないと、シンは少し反省した。

「悪い、待たせたか？」

「我らも今しがた揃ったところだ。シュニーはまだのようだが」

「そのうち来るでしょ。飲み物でも用意して待ちましょ」

ゲーム時代のシンのサポートキャラであるシュバイドとフィルマが、気にしていないと答えた。二人ともシンがシュニーと何か話をしたと察しているようで、案外落ち着いている。

同じくサポートキャラのセティは、元プレイヤーであるミルトと精霊を交えながら話をしていて、ティエラだけが落ち着かない様子で、相棒である神獣の変異種——カゲロウが寄り添っている。

「お待たせしました」

5分ほどして、シュニーもやってきた。

全員の視線が自分に向いたのを確認し、シンは冥王との対談の内容を語り始める。

やはりというべきか、反応が大きかったのは、シンが今いる世界から元の世界へ戻るとい部分だった。それを真っ先に伝えることも考えたが、そうすると他の話ができなくなりそうだったので、シンはこの話題を最後の締めとして話した。

「なるほどね。だから間を置いたってわけ」

納得したという風に、フィルマがつぶやいた。

この話題に一番反応してしかるべきシュニーに動揺の色がないことを見れば、フィルムたちにはすぐに察しが付く。

サポートキャラクターの面々は、仕方がない奴だといった様子でシンを見ているが、ティエラだけはジトツとした目を向けていた。こっちはやきもきしていたのに……という心情が、視線とともに突き刺さってくるようだ。

フィルムが続ける。

「それにしても、元の世界に、ね。それってき。もうこっちには戻ってこないってことよね」

「そうなるな」

「他の人がこっちに来ることもない？」

「それはわからないけど、たぶんないだろう」

もつとも、今こっちの世界に来ているメンツの全員がシンと関わりがあったかと言えば、微妙なところだ。

シンが叩き潰したPK、親交があったプレイヤー。それ以外にも、ある程度数がこちらに来ているだろう。

その中には、シンとは別の流れでこの世界に来ている者もいる可能性がある。

冥王も、シン以外は本体が死んでいる——ミルトは例外中の例外——ので、シンよりもこちらに来るハードルが低いと言っていた。

もともと、世界と世界の間を、形のない力が多少は循環していたようなので、シンの移動に合わせて魂のようなものが一緒に流れてきてもおかしくはない。

冥王もすべてを知っているわけではなかったので、憶測の一つだと前置きして、その話をしていた。

ただ、シンが向こうに戻れば、そうした力の循環もなくなる。

二つの世界の繋がりは希薄になり、たとえ魂のような曖昧なものであっても、行き来はできなくなる。そうなれば、もう戻ることとはできない。

シンはもちろん、一緒に行くシュニーもそうなる。

「そっか。寂しくなるわね」

そうつぶやいたセティの口調に乱れはないが、その表情は少しだけ悲しそうだった。

シンのサポートキャラクターは、ハイビーストのジラート以外は長命種。長い月日の中で、離別や死別は何度も経験しているはずだ。

それでも、親しい相手との別れは、慣れるものではないのだろう。

「でも安心したわ。これでシュー姉を置いていくなんで言ったら、一発ぶち込んでたわよ」

「話を聞いた時は、俺も真っ先に思ったよ。シュニーと離れ離れになるのだから」

残された時間を聞いて、頭を抱えたくなったのは記憶に新しい。



「他の子？」

「ベレットとか、ザジたちとか。皆、いつか主あるしが戻ってくるって信じてるから。実際、シンは戻ってきたわけだし」

ベレットやザジといった、他の『六天』メンバーのサポートキャラたちには、ある意味、諦めかけていたところに希望を見せてしまったとも言える。

たとえそれがシンの意思ではなかったとしても、彼の帰還は、周りには、そういう風に見えて  
いるのだ。

「仕方あるまい。もとより、シンが戻ってきたのも偶然が重なった奇跡のようなもの。本来の形に  
戻るだけだ」

一度得ただけに、手放しがたいが……と、シュバイドは続けた。

当然、セティの言いたいことは、シュバイドだってわかっていた。主を待ち焦こがれる気持ちも、  
それが叶かなった時の喜びも知っている。

「他の子には言えないわね」

フィルマは首を振って二人を見た。

ベレットやザジたちの心の中で、主との再会がどのくらいの割合を占めているのかはわからない。  
もうその願いは叶わないのだと他の『六天』のサポートキャラクターたちに告げることが、良い  
ことなのか悪いことなのか。誰にも判断はつかなかった。

気にしないかもしれないし、絶望してしまうかもしれない。

ただ、誰もが真実を知り、思いを振り切つて前に進めるわけではない。

自分たちもそうだっただけに、話すという選択はできないと、フィルマは言った。

シュバイドもセティも、それに反論はしなかった。

「ええと、シンの世界？ 一緒に行くには、アイテムと一体化する必要があるって話だけど、そ  
れはもう終わってるの？」

重くなった空気を変えようとしたのか、ティエラが質問した。

シンはすぐにそれに乗って答える。

「ああ、もう終わった。もうわかっているとと思うけど、さつき休憩をとつたのは、それをシュニー  
に話すための時間が欲しかったからなんだ」

「ふむ、シュニーの様子から察してはいたが、問題はなかったようだな」

静かにたたずむシュニーを見て、シュバイドが言った。

「でも、思い切つたわね。全部投げ出してシンについていくなんて」

「後悔はありません。置いていこうとしたら、こちらから追いかけていったでしょうね」

冗談じみたフィルマの言葉に、シュニーは冗談には聞こえない返答をした。

「シュニーならやるわね」

「うむ」

「納得しかないわ」

「……ですね」

テイエラを含め、誰も否定しないあたり、周囲がいかにシュニーを理解しているかがうかがえる。「寂しくなるけど、シュニーが本懐を遂げるなら、仕方ないか」

「うむ、シュニー以外が選ばれていたら大問題であった」

優しげな微笑を浮かべるフィルマに、うんうんとうなずくシュバイド。シンがいなくなることにシヨックを受けている様子はない。

「あたしはこっちに残ってくれた方がよかったです」

セティはぶーぶーと口を尖らせる。

少しわざとらしい仕草だが、本音なのは間違いない。

「それは皆同じよ」

苦笑するフィルマに、シンが応える。

「悪いな。俺としては、本気でこっちに残るつもりだったんだが」

シュニーへのプロポーズなど、その気がなければとでもできない。

とはいえ、もし何も知らなければ、ある日突然別れが訪れていたことになるので、その点は冥王に感謝するべきだろう。

「そうなるよ、向こうに行くまでに、もっと楽しい思い出を作らないといけないわね。冥王の話が

本当なら、これからもトラブルに見舞われるわけだし」

フィルマが大きく手を叩いて提案し、場の雰囲気を変えた。

そういえば、こちらに来てから純粋に娯楽を楽しんだことなど、数えるくらいしかなかった——

と、シンが思い返していると、ミルトから【心話】が飛んできた。

『シンさん、愛されてるねえ』

『コノヤロー、ちょっと離れた位置から楽しんでやがるな』

ミルトは少し遠くから騒がしい面々を眺めていた。

【心話】で話しているのを見た目には静かだが、シンの耳に届く音なき声は、フィルマたちと同じくらい騒がしい。

『いやー、僕はシンさんと同じで強制送還だからねー。離れ離れになる心配はないし。あ、向こうに戻る前に、連絡先教えてね！』

連絡先を覚えておかないと、向こうで連絡が取れないというところはその通りなので、あとで教えると約束する。

「ほら、シンとミルトちゃんも、眺めてないで話し合いに参加する！」

仕切っているのはフィルマだ。せっかくなので、娯楽目的の旅をするのはどうだろうか、皆に提案している。

とはいえ、この世界では国から国へといった長距離の移動に危険が伴うため、娯楽目的の旅

は盛んではない。したがって、観光地や行楽地、娯楽施設の情報はあまり出回っていない。

フィルム自身は長く眠っていたこともあって、『栄華の落日』後の世界について詳しくないので、シュニーとシュバイドに話が振られた。

「観光や娯楽に力を入れている国でしたら、いくつか良さそうな場所があります。シュバイドはどうですか？」

「私も少しは心当たりがあるが、目的が曖昧すぎるな。もう少し何を楽しむか絞った方がよろう」

シュバイドも乗り気だ。元竜王という立場もあって、他国の情報にも詳しいのだろう。そして、世界を飛び回っていたシュニーについては、言うまでもない。

「ミルトはどうなんだ？」

「おすすめできるような場所かあ。少しは知ってるけど、又聞きの情報が多いから、自信を持ってすすめられる場所は、ぱっと思いつかないかな」

観光業を目玉にしている国もあるようで、そのあたりを候補に考えようと話が進む。

そんな中、シンは誰かが自分の袖を引っ張っているのに気がついた。

振り向くと、ティエラがそばまで来ていた。

「どうかしたのか？」

エルフの集落——園と、月の祠で長く過ごしていたティエラは、シュニーたちのように他国の情

報に疎い部分がまだ多い。そのため、話に加わりにくいのかとシンは思ったが、そうではなかったようだ。ティエラが遠慮がちに切り出す。

「この雰囲気だと言いくいんだけど、亡霊平原の調査の件、ギルドへの報告はどうするの？ 何も言わないのもどうかと思うし、かといって正直に伝えるわけにもいかないでしょ」

「そうだな……特定の条件下で出現するダンジョンの影響ってことにするか」

イベント用のダンジョンに冥王の力も加わっておかしなことになっていた、というのが真相だが、それを正直に言っても信じてもらえないか怪しい。

Aランクのシンの言葉なら、まるっきりのでまかせとは思われないだろうが、証拠になるようなアイテムがあるわけでもない。

「冥王が眠りについたらモンスターの発生も以前と同じになるはずだし、それを確かめてから、もつともらしいストーリーを考えるかな」

もともとモンスターの発生していたエリアだ。人も滅多に近づかない。元の通り、隔離に近い状態にしておけば問題はない。

「とはいえ、念のため何泊かしてか様子を見る必要はあるか」

モンスターの発生頻度については、冥王の推測が根拠だ。本当にそうなるか、確かめておいた方がいいとシンは判断した。

「そうね。その方がいいと思うわ」

「ティエラ……顔色がよくないぞ」

リビングに集まった時よりも、元気がない。

「あんな話を聞かされたら、いつも通りにはふるまえないわよ」

フィルムマに関しては本人の性格の影響もあるだろうが、この場にいる面々は、良くも悪くも出会いと別れを繰り返してきた。

皆、シンやシュニーとの別れを悪いものとは思っていないのが伝わってくる。

しかし、ティエラはそういった割り切りがすぐにできないようだった。

「悪いな。もう少しましな伝え方もあったのかもしれないけど、俺には思いつかなかった」

「シンが悪いわけじゃないわ。私を受け止め切れていないだけ」

どちらかといえば、ティエラの方が正常な反応だとシンは思う。むしろフィルムマたちは、いろいろと切り替えが早すぎるのだ。

「ごめん。もう少し休むわ」

「あ、じゃあ私もそうしようかしら」

リビングの出口に向かうティエラを追って、セティが動いた。彼女はシンたちに向けて、任せてというように小さくうなずく。フォローに回ってくれたようだ。

フィルムマたちもそれを察していたようで、無言でうなずき返している。

ティエラが見えなくなったところで、ミルトがシンに声をかけた。

「さすがにショックだったみたいだね」

「今は落ち着いてるけど、俺たちだって驚きの内容だったからな」

「理由はそれだけじゃないだろうけど、ね」

「言うな」

ね、の部分強調しながら見つめてくるミルトに、シンは顔をしかめながら応えた。

これまで行動を共にしてきたティエラの内心を察せられないほど、シンも鈍感ではない。

ユズハに乙女心がわかっていないと怒られたばかりなので、少し自信はなかったが。

「フォローはセティさんに任せるしかないかな」

「そういえば、ミルトもたまにセティと話してるよな」

ミルトがティエラ以外にも交流を持つようになったのは、割と最近だ。

「今のパーティだと、僕とセティさんがダントツで小柄だからね。気持ちがわかるというか。ハイビクシー同士で話が合いやすいっていうのもあるし」

この世界の平均身長がどのくらいか、シンにはわからなかったが、それでもパーティメンバーは全体的に長身だ。それぞれの種族ごとに見ても、シンとシュバイドの男性陣、シュニーやフィルムマといった女性陣はいずれも同族の中では背の高い部類になる。

シンの感覚では、ティエラぐらいが普通だ。ただ、長命なエルフであるティエラはまだ成長期なので、これからもっと伸びる可能性がある。

だが、ミルトとセティは違う。ミルトはリアルの体格を反映しているらしいのでこれ以上伸びないし、セティもシンが今の身長で設定してしまったので、恐らくこれ以上成長しない。

『ほんとに、サポートキャラクターだったころの面影おもかげなんて、見た目だけだね』

ミルトは唐突に口頭での会話から【心話】に切り替えた。

他のメンバーには聞かせられない話だろうか、シンは何でもない風を装よそおって、視線だけフィルマたちの話し合いに向けながら応える。

『どうした、急に』

『僕は今までサポートキャラクターと話す機会ってほとんどなかったからさ。こっちの人——現地人とも言えばいいのかな。その違いを頭ではわかってたけど、無意識のうちにゲームのイメージに引張られてた。どこか違うんじゃないかって。でも、話せば話すほど、人だなあって』

ミルトとシュニーたちとはこちらで再会した時にも行動を共にしていたが、短い時間で、あまり会話もなかった。しかし、今回は違う。長く一緒に過ごしたことで、見えていなかったものが見えるようになった気がする、ミルトは言った。

シンはこの世界に来てからさほど時間が経っていないうちにシュニーと再会していたせいか、ミルトの言うゲームのイメージはほとんどない。

ゲーム時にNPC——プレイヤーの操作していないキャラクター——として扱われていたという意味では、現地人もサポートキャラクターも一緒だ。

『彼女らも人なのは当たり前で、今更なだけどね』

こちらに来てからのことを話したシンに、ミルトはそう返した。

『考えさせられる話でもあったのか？』

『認識を改めさせられたって感じ。特別なエピソードとか、そういう話があったわけじゃないんだ。ただ、セティさんもいろいろ考えてさ。普段の様子も、そういうのを知ってる状態で見ると、少し見方が変わるっていうか』

『普段の様子？』

はて何かあったか？ とシンは考えるが、思いつかなかった。

『ほら、セティさんは妹的な立ち位置のキャラクターとして設定したって言ってたじゃない。彼女としては、無意識にそうふるまっている時と、意識的にふるまっている時があるらしくてさ。最初は悩んだみたいだけど、今はどっちが本当の自分なのかって悩むんじゃないって、どっちも自分だとして受け入れてる。自分で自分の存在にきっちり答えを出してる。僕にはそれが、少しまぶしく見えただよ』

『そんな風に考えていたのか』

ミルトの話を聞いて、シュニーたちも同じように悩んだのだろうか、シンは思う。

ゲームの設定として与えられた性格キョウゲと、この世界の自意識の摩擦まそつ。ミルトよりも長く行動を共にしているはずなのに、シンはそういった悩みをシュニーたちが抱えているとは気づかなかった。



単純に、500年の歲月の中で彼女たちが自己解決したから、シンが気づくほど表面に出てこなかったかもしれないが。

セティのことだって、ミルトに聞かなければ知らないままだっただろう。

そういう意味では、長く眠っていたフィルムが心配なところだが、一番隠すのがうまそうなので、シンは見抜く自信がなかった。

『500年は伊達<sup>だて</sup>じゃないって感じ。僕ももっと大人にならなきゃ』

『まあ、年齢って意味じゃ、ミルトもこっちでなが——』

ヒューマン換算だとすでに老人の領域では、とシンが考えていたところに、無言のボディプローが打ち込まれる。

たとえ気の置けない仲であろうと、女性に歳の話はタブーということだ。ミルトに圧のある笑顔向けられて、シンは素直<sup>すなお</sup>に謝った。

近づいてきたセティが、呆れ<sup>あき</sup>気味に尋ねる。

「二人とも、何やってるのよ」

「俺がちよっと失言をな。ところで何か決まったのか？」

行き先が決まって呼びに来たのかと、シンは尋ねた。

「いくつか候補が決まったから、シンたちにも意見を聞こうと思って」

テーブルの上には何枚か地図が広げられており、その上に1セメルほどの楕円<sup>だえんけい</sup>形のガラス玉がい

くつか置かれている。

「青いガラス玉が置かれているのは、観光を売りにしてる国や都市。赤い方はちょっと他とは違う景色が見られるとか、おいしいものがあるとか、そういう場所よ。あとは、何がしたいかで行き先が決まるわ」

地図に手をやりながら、セティが大まかに説明してくれた。

「ふむふむ、観光地の内容を教えてもらえるか？」

一口に観光地と言ってもいろいろある。地図の上に置かれた青いガラス玉は六つ。大陸を上下で分けた地図のうち、上部のエスト側に四つ、下部のケルン側に二つ置かれている。

情報提供はシュニーのようで、彼女が説明してくれる。

「エストの上側の二つ。これは温泉がある国です。実際に足を運んだことがあるので、間違いありません。片方は鍛冶も盛んでしたね。地熱を利用したブルーもありました」

以前、シュニーは火山の調査協力を要請されて、現地に行ったらしい。

次いで、シュバイドがガラス玉を指さす。

「残りの二つのうち、こちらが珍しい植物を集めた植物園がある国。そっちが火と水の木がある国だ」

「火と水の木？」

聞き慣れない単語に、シンはつい聞き返してしまった。

「シンがまだいたころ、文字通り木全体がそれぞれ火と水でできた植物があっただろう？ 周囲に与える影響も少なく、素材として貴重なものだったはずだ」

「ああ、あれか」

詳しい内容を聞いて、シンはゲーム時代の記憶の中から該当するものを引っ張り出す。

正式名称は聖炎樹と聖氷樹。根、幹、枝、葉にいたるまでが、片方は火、もう片方は水でできた植物で、本物の樹木と同じように成長する。

氷はともかく、実体のある火がどういうものか、シンにはうまく説明できないが、聖炎樹は燃えていても中心部分に柔らかい芯のようなものがある木だ。

ゲーム時代は、エリアのどこかにランダムに出現する素材アイテムという扱いだった。

周りが燃えたり、凍ったりすることもなく、何の変哲もない林の中にポツンと一本生えているというのが、発見者の見る光景だ。

「まさかあれが何本も生えているのか？ 確かに見えたえはありそうだ」

聖炎樹は時間帯によって火の色が変わり、聖氷樹は日の当たり加減で七色に輝く。その様子はとても美しいと有名なのだそうだ。

「話を遮って悪かった。残りはどうなんだ？」

「ケルン側の一つは、ドラゴンが守っている国。ドラゴンがお姫様を気に入っているらしくて、配下の小型ドラゴンに乗って空の旅が楽しめるらしいわ。海も近いからクルージングもできるって話

よ。で、最後の一つが、遊園地ね」

「遊園地？」

こちらではまず聞くことがないだろう単語に、シンは思わずファイルマに聞き返した。

「『栄華の落日』前の施設が生きているみたいなの。情報提供はセティよ」

セティがピクシーの集落である『苑』<sup>さお</sup>の外の情報も集めていたというのは、本当らしい。

そして彼女は、ティエラのフォローに回りながら、並行して『心話』で話し合いに参加していたようだ。

「規模はどのくらいなんだ、セティ？」

「ちょっとした都市並みね。王族は中央に立っている城に住んでるみたい。レールの上を高速で動く籠<sup>かご</sup>とか、一瞬でいろんな国に行ったような気分になる乗り物とか。よくわからないものもあるぞうよ」

また、遊園地を囲んでいる外壁も過去の技術で作られているため、モンスターの群れが突っ込んできても安全という触れ込みだ。

その国は遊園地を内部に抱え込む形で自前の防壁を築いている。人の住む国土という点では、大陸でも一、二を争う規模らしい。

「『夢の国』か『フィクション』ノンフィクション』あたりが造りそうなやつだな」

シンが口にしたのは、生産系ギルドの中でもアトラクション施設を造らせたらここだろうと名が

挙がる、有名ギルドだ。

『夢の国』の方は、オブジェクトの基礎となるデータをいじり倒し、ゲーム内に本物と見紛うばかりの遊園地を造ってみせるという離れ業<sup>はなむね</sup>をやったのけた。そのあまりの出来栄<sup>できばえ</sup>に、運営が賞賛したほどである。

ただ、あまりにも現実の遊園地に似すぎていて、どう言い訳しても著作権的な問題でアウト。

あわや訴訟かというところで、まさかのオリジナル側から声がかかり、宣伝も兼ねて一部の施設の存続が許されるという事態に発展した。

もう一方の『フィクション』ノンフィクション』は、現実では不可能な、魔法を組み込んだアトラクション施設の製作がメイン。

両ギルドの特徴から判断して、セティが言う遊園地を造ったのは、『夢の国』だろうとシンは思った。

「俺は行くなら温泉かなって思うけど、皆はどうだ？」

「私は賛成です。体だけでなく、心も癒<sup>いや</sup>されますし」

「うむ、あれはいいものだ」

シンが問うと、シュニーとシュバイドはすぐに同意した。

月の祠の風呂もこの世界では最上級クラスだが、それとこれとは話が別。仮に湯の成分が同じでも、温泉となると、癒され度が違うのだ。



ミルトも同感とうなずきながら、【心話】で話しかけてくる。

『実は僕、温泉って初めてなんだよね。風呂上がりといえば卓球と聞いたけど』

『温泉はいいぞ。卓球はわからん』

リアルではほとんど寝たきりだったミルトは、漫画やゲームの知識が元なので、温泉といえば卓球というイメージらしい。

「私はドラゴンが気になったけど、今のシンが行くと、ひと騒動ありそうよね」

フィルマの表情や声こゑから悪意ではなく悪戯いたずら心からくる発言だとわかるので、シンも少しオーバリーアクションで返した。

「人を疫病神やびょうがなみたいに言うなよ」

「何もないって断言できる？」

「ぐぬぬ……か、確実とは言えないだろう」

トラブルが起こる確率が高いことは間違いないので、シンも弱々しい反論しかできない。

『ティエラちゃんは温泉でいいって。でも私は遊園地が気になるー』

【心話】經由で、セティがティエラの意見を代弁した。

情報提供したセティ自身も遊園地に行ったことがあるわけではないらしく、好奇心が刺激されるようだ。一方ティエラの方はシンの話を聞いた時の動揺が落ち着いてきたようで、できれば動き回るようなものは遠慮したいらしい。

『今回は温泉にしよう』

全員に意見を聞いて、シンが決めた。

もともと温泉は多数派であり、妥当な判断だった。

他のところは別の機会、場合によっては温泉の後に行ってもいい。

フィルマ、セティの両名も行き先に固執こしつすることはなかったの、まずは目的が決まった。あとは候補に挙がったうちのどちらに行くかだ。

「規模はどっちが大きいんだ？」

「こちらですね。国としての大きさもかなりのものです」

シュニーの細い指が指し示したのは、大陸の中央からやや北西に位置する、『クリカラ』という多民族国家だ。商業の国であり、王はいるが絶対的な権力者というわけではないようで、有力な商会の代表や優秀な技術者なども国政に取り込んでいるという。

もう一方は、大陸中央から北東にある『マデレニ』という、こちらも商業の国。規模はクリカラの3分の1ほどで、まだまだ発展途上らしい。もともとクリカラの商人たちが出資して行われた開拓の成功例であり、温泉が見つかったのは偶然のようだ。

「そうになると、行くのはクリカラかな。名前の感じが日本っぽいけど、何か知ってるか？」

「ヒノモトのようにどこかのギルドハウスがあったという話は聞いたことがないので、最初の代表者がシンと同じプレイヤーだったのかもしれない」

シンは言葉の意味はわからなかったが、俱利伽羅クリカという言葉があるのは知っていた。しかし、有名どころで同じ名前のギルドに覚えはない。

「では、次の行き先はクリカラに決定だ」

メンバーからの反対はなく、行き先が決まった。

次はおおよその移動ルートふの検討だ。ああでもないこうでもない意見いを交わしているうちに、夜は更けていった。

+

亡霊平原のダンジョンから出て、数日。

以前と変わらない状態に戻ったと判断し、シンたちはベイルリヒト王国に戻った。

現場の騎士からも、モンスターの減り具合を見て、問題ないだろうとお墨付きをもらっている。

シンたちがギルドに調査終了の報告をするとすぐに、ギルドマスターのバルクスからお呼びがかかった。

原因を解決したのがシンたちだとわかっているかのようなスムーズさだ。

報告するだけならシンだけでも十分なので、シュニーたちは先に宿に戻ってもらう。ただ、今回はとある理由でシュバイドもシンに同行した。

ただ、通された部屋にはバルクスや、アイテム鑑定を受け持つアラッドといったギルドのメンバーだけでなく、リオン王女もいた。

「さて、では何があったのか聞かせてもらえるかな？」

バルクスに報告を求められたシンだったが、話を始める前にリオンに視線を向ける。

「それは構わないですが、なぜ今回もいるんです？」

「なんとなく、今日お前が来る気がしてな。無理を言っただけで待たせてもらっていた」

「予知能力でもあるんですか」

本人は勘だと言っているが、シンにはもはや勘が良いというレベルを超えているとしか思えなかった。

もっとも、リオンの身分はベイルリヒト王国第二王女。王国の騎士も出向いているのだから、ここにいなくともいずれ耳に入る。

戦闘になれば自ら剣を持って戦うリオンだ。出現するモンスターや今回の異変の原因について、気になることがあるのだろうとシンは考えた。

彼女に聞かれて困る話でもないので、シンはシュバイドの紹介を済ませてから、話を進めることにした。

「亡霊平原で何があったかについてですが、結論から言えば、噂のダンジョンは存在しました。しかし、今はもうダンジョン内に入ることはできません」

「ダンジョンは消滅した、ということかな？」  
バルクスが小さく首をかしげる。

「ダンジョン自体はまた出現する可能性があります。亡霊平原のモンスターの出現率や傾向は、今回の騒動より前の状態に戻ったところですよ。モンスター自体は出現しますし、中央部分が危険なのは変わりありません。ただ、件のダンジョンくたんの入口はもう消えていますし、地下にもそれらしきものは残っていませんでした。ダンジョンの影響と思われる、今まで見かけなかったモンスターの出現もなくなっています。しばらく経過観察は必要だと思いますが、心配はないかと」

シンたちが数日過ごした際も、モンスターの出現率は亡霊平原に着いた当初よりかなり下がっていた。

中心部分に高レベルの個体が出現することや、モンスターの種類がアンデッドかたよに偏っているのは変りないが、今までいかなかった個体は確認できず、騎士からの情報にもそれらしきものはない。中心部分を結界で囲むという、元の対処法に戻しても問題ないと、シンは判断していた。

冥王が眠りについたことで、以前の状態に戻ったのだろう。

「どのようなダンジョンだったんだい？」

「特定条件下でのみ入口が出現するタイプでした。どうやら、本来いないはずのモンスターがダンジョン内に生まれたことで、外にまで影響が出たんだと思います」

本当の原因は冥王だが、それを正直に言う気はシンにはなかった。次に同じようなことが起こる

としたら、シンが向こうに戻るか、冥王に何かあった時だ。

「ふむ、君はそのダンジョンのことを知っていたのかい？」

「いえ、それはシュバイドが知っていました。彼の親は旧世代なんです。当時の話をよく聞かされていたらしくて」

シュバイドが無言でうなずく。彼は身分を偽いつわっているが、名前については、両親が竜王にあやかってつけたと本人が伝えている。

「……なるほど、旧世代の長命種となれば、我々がおとぎ話とと思っているようなことも経験しているか」

バルクスは月の祠の紹介状をもらうくらいの人物だ。シュニーとどのくらい交流があったのかシンは聞いていないが、少なくとも旧世代がどういふものかはある程度知っているのは間違いない。納得したという表情がそれを物語っていた。

「ダンジョンが出現する条件を聞いてもいいかな」

「夜に出現するというのが条件だ。しかし、夜ならいつでもというわけではないらしい」

バルクスに問われたシュバイドが、当時はこうだったと伝える。

ゲーム時代は最初に実装されてから、その評判の悪さで出現条件と期間を緩ゆるめて一度だけ復刻開催されたっきりだ。

今回は初期の方の出現条件だったので、次にいつ出現するのか、そもそも今後の出現自体あり得

るのかもわからない。

ただ、冥王曰く、自分が干渉しなければ変化はなかっただろうということなので、そのまま最後まで入口が出現しなかった可能性は高い。

「ここに来るまでに確認した。500年以上前に一度、一定の期間だけ入口が出現し、その後はまったく姿を見せなかったようだ。ゆえに、また500年以上音沙汰がない可能性も否定できん」

【心話】による遠距離通信は、長命種ならば使える者もそれなりにいるらしいので、この打ち合わせの際に、シュバイドが確認をとったという形にした。

「城にあった資料も、かろうじて伝わっていたところですかのう」

アラッドが顎鬚を撫でながら言った。彼が話題に出した、ベイルリヒト王国の書庫にあった資料は、プレイヤーかサポートキャラクターあたりが書き残したのかもしれない。

「そうなるか。シン、本来存在しないはずのモンスターというのは、どういうものだったのだ？」

「フェイスマンといって、人の姿を真似るドッペルゲンガーというモンスターの上位種がいました。自分と戦うのは妙な気分でしたよ。ただ、倒しても素材の類が残らなかったため、証明のしようがないんですが」

ダンジョンに出現した人型の装備でも残っていれば話が早かったのだが、何も残さなかったため、モンスターがいたという証拠はない。

代わりになるかはわからないが、ダンジョンから脱出する際に補給地点の物資や建材などを確保

していたので、シンはそれを布袋から取り出してテールに載せた。

ギルドに入る前にアイテムボックスから出して、具現化した状態で布袋に入れて持っていたのだ。

「食器に鉱石かな。ダンジョン内にあったというのは、少々腑に落ちないが」

「ダンジョンの中は闘技場のような戦う場所と、補給地点のような場所が交互に配置されていた。

これは以前出現した時と同じようだ。ただ、聞いていたようなアイテムの類はなかったが」

バルクスは少し訝しがったが、両親から得た情報と前置きして、シュバイドがダンジョンの説  
明をした。

実際にダンジョンを探索した者からの情報であり、食器や鉱石もアラッドが鑑定して、ただの鉄  
や石の類ではないと断言したことで、理解を得られた。

「ところでシン。この後の予定はあるか？」

話に一区切りついたところで、リオンが話しかけてきた。

「思ったより消耗が激しかったので、少し長い休暇をとる予定です。実はもう具体的な行き先が決  
まっています」

冒険者が大仕事の後に休暇をとるのは珍しいことではない。シンたちは、騒動の原因であるダン  
ジョンに挑み、半ば攻略している。客観的に見て、今回の一件は休みをとっても何らおかしくない  
だけの案件だった。

「今更かしこまらずともよい。楽に話せ」

王族相手にそれはだめじゃないかとシンは思ったが、リオンの期待するような顔を見ると断りづら

い。バルクスとアラッドは、やれやれと言いたげな表情だ。

このメンツならいいかと、シンは言葉遣いを素に戻すことにした。

「で、どこに行くのか聞いても？」

「……まさか、ついてくる気じゃないだろうな」

リオンならやりかねない。そんな気がして、シンはつい聞いてしまった。

「パーティで休暇をとろうというところに割り込むような真似はしない。純粹に気になっただけだ」

「まあ、そういうことなら。クリカラつてところに行く予定だ」

「クリカラ？」

リオンは初耳だということで、シンは簡単に説明した。

「エスト側の国か。聞き覚えがないはずだ」

ベイルリヒト王国からだ、ケルンを横断して、かつエストも半分以上踏破する必要がある。この世界では、まず移動することのない距離だ。当然国としての交流もなく、情報も少ない。

「ただの休暇で向かう距離ではないだろう。馬車では気が遠くなるくらい時間がかかるぞ」

「移動には当てがあるんだ。ダメなら別の場所を考える」

エスト側には転移ポイントがいくつか設定してある。単純な移動スピードも、カゲロウが馬車を引いて爆走すれば、この世界では考えられないほどの時間短縮ができる。

しかし、リオンはそれを知らないのです、シンたちがどうやってそんな遠くまで行くつもりなのか、興味津々といった表情をしている。

「当てというのにも気になるが、興味本位で聞いていいことではなさそうだ。もしその当てが外れたら私のところへ来い。友として遇しよう」

「気が休まりそうにないな」

少し大仰な仕事で言ったりリオンの言葉が本気か冗談か、シンには半々に見えた。

+

リオンたちと別れたシンとシュバイドは、馴染みの宿である穴熊亭に向かった。待ち合わせに使わせてもらったのだ。

払いすぎた宿代は迷惑料としてそのまま納めてもらったので、その代わりに少しくらいは便利に使えと、店主からの計らいである。

シュニーたちと合流し、一行はベイルリヒト王国からクリカラへ向けて出発する。まずは人の目を避けての【転移】だ。

景色が変わり、そこはもうケルンではなくエストだった。

「さて、ここからまたカゲロウの出番だ。任せるぞ」

御者台ぎよしゃだいに座ったシンが声をかけると、カゲロウが一声鳴いてから走り出した。

冥王からもたらされた情報は、シンたちに様々な思いを抱かせるには十分すぎるほど衝撃的だった。

心と体が休息を求めている。早く温泉で癒されたい。手綱たづなを握にぎりながらそんなことを思うシンだった。

【転移】とカゲロウの脚力を駆使した高速移動のおかげで、2週間ほどでシンたちはクリカラに着した。

シンたちが進む方向からだと、山を背にした都市が見える。山の名前はクリカラ山。その名前が都市名の由来になっているようだ。

「クリカラ山って、もしかして活火山ですか？」

「はい。10年ほど前にも、小さな噴火があったようです」

クリカラ山を見ながら言ったミルトに、シュニーが答えた。

ミルトが確認したのは、周囲に火の精霊が散見されたからだという。シンには見えないが、活火山の近くは火の精霊が集まりやすい傾向にあるようだ。

精霊の影響か、モンスターから得られる魔石には火属性が付与されていることが多く、それを鍛

冶や生活の一部で活用していると、シュニーが教えてくれた。

「シンさんの鍛冶場も魔石を使ってたんだっけ？」

「大まかには、そうだな。俺のところはいろんなタイプのいいとこ取りをしているから、一言でどのタイプっていうのは難しい。上位の鍛冶師の炉は大体そうだった。ただ温度を上げるだけじゃ、溶けない金属とか素材もあるからな。武器一つとっても、ゲーム時代は鍛冶師ごとにやり方が違ったりして、けっこうおもしろかったぞ。答えは一つでも、そこに至るまでのルートがいくつもある感じで」

まだ鍛冶初心者だったころ、金属の配合から炉の温度、鉄の打ち方に至るまで、よくここまでプログラムしたものと、他のプレイヤーと一緒に呆なれていた——シンは、そう当時を懐かしんだ。

「でもまあ、魔石由来の火が一番扱いやすいのは間違いない。よほどおかしな炉でないかぎり、火の温度がすごく安定するからな。料理用のコンロみたいな、火力の調整がきく道具は大体このタイプだ」

月の祠のコンロも魔石を使ったタイプだ。周囲の魔力を自動で魔石に溜め、それを用途に合わせて使う。

「言われてみれば、僕の使ってる野外用のミニコンロも、魔石を使うタイプだ」

自分のアイテム一覧を見ていたミルトは、他にもあったつくとリストをスクロールしている。教会での奉仕ほうし中は他のメンバーもいたので、使わなかったらしい。

「それにしても、思ったより並んでるな。やっぱり、人気の観光地だからか？」  
周囲を見回すシンに、シユニーが答える。

「商人には見えない人が多いですし、催し物もじよでもあるのかもしれない」

クリカラを囲む防壁の入口へと続く馬車の列。商人とその護衛というわかりやすいものから、普通の冒険者パーティ、鍛冶師の集団なんでもいる。

ジョブが商人でない一般人は観光だろうが、今まで見てきた都市と比べても列が長いように思えた。

「こりゃ時間がかかりそうだな」

「一台一台しっかり確認してるみたいよ」

シンのつぶやきに反応して、ティエラが馬車の上から列の先を確認した。どうやら、荷物のチェックがかなり入念に行われているようだ。

「荷物検査をするつてことは、何かの式典でも開かれるのかね」

「錬鉄武闘祭れんてつぶとうさいが開かれるんですよ」

意外にも、シンの言葉に答えたのは、パーティメンバーとは違う男性の声だった。

シンは返事があった方に目を向ける。

人が近づいて来ていたのはわかっていたが、話しかけてくるとは思わなかったのだ。

振り向いた先には、髪を短く刈り込んだ若い男が立っていた。

外見から判断すると、種族はヒューマン、ドワーフ、ロードのうちのどれか。身長はシンよりも

頭一つ低い、半袖の服から伸びる腕のたくましさを見れば、一般人ではなさそうだと予想できる。

「突然すみません。戸惑っているようでしたので、あ、自分はクリュックといいます」

お節介せつかいでしたかと謝る男に、シンはとんでもないと返す。

「何かあったのかと思っていたところです。俺はシンです。それで、『錬鉄武闘祭』？ というのは、どんな催し物なんですか？」

クリュックによると、『錬鉄武闘祭』は鍛冶師による作品の品評会である『錬鉄祭れんてつさい』と、武器も身分も問わない『武闘祭ぶとうさい』の合同イベントだという。

4年に一度開かれ、エスト中の腕利きだけでなく、場合によってはケルンからも参加者がやってくるほどだそうだ。

4年に一度の大祭と聞き、シンはオリンピックを連想した。

錬鉄祭は、同じ素材と設備を使って出来上がった作品を比べる『数打かずうちの部ぶ』と、素材や道具の持ち込み自由で、とにかく最高の一品を作り上げる『真打まうちの部ぶ』に分かれている。

『数打の部』の優勝作品はクリカラの宝物殿に奉納ほうのうされ、『錬鉄武闘祭』が開催している間だけ一般公開される。

武闘祭は、シードを除いてバトルロイヤルから勝ち残った選手でトーナメントを行い、優勝者を決める。優勝者は『真打の部』で入賞した作品の中から好きなものをもらうことができる。ちなみ